

風土を温める

あたた

シリーズ 高山の文化財①

【国指定重要文化財】 飛驒のそりコレクション

雪国である飛驒地方では、冬期間の運搬手段として、そりが盛んに用いられてきました。そりは、斜面・馬・人力を動力とし、用途や積雪量、雪質の違いなどによって、さまざまな種類が使い分けられ、それらの違いを巧みに利用した簡単かつ合理的な道具といえます。

山林資源の豊富な飛驒地方では、昔から林業が盛んでした。木材の切り出しとその運搬は、飛驒人の営み



木馬道をいく

を代表する生業の一つともいえます。

山林で伐採された木材の曳き出しには、道がなくても搬出できるよう、積雪期に手ざりを利用して行われました。そのため、冬期間の重要な仕事として、専業の職人だけでなく農閑期の農民も従事しました。

また、雪のない季節には、木馬道を作り、丸太の上を滑らせながら木材を運び出す方法が盛んに行われました。

囲炉裏などで燃やす薪は、冬の厳しい飛驒地方において重要な燃料であり、暖房用として大量に消費されました。各村の共有の山林（入会山）や私有の山林から薪を運んだり、切り出し



バランスをとりながら手ざりで木材を運ぶ

たりする仕事は、冬の重要な生業の一つでした。

飛驒地方では薪のことを春木や楢と呼びます。これらを運搬するため、そりは目的によって使い分けられました。山から運び出して道路まで出すときは「山出しざり」を、家まで運ぶときは「引付けざり」などが使われました。また、薪を町などに売りに行くときは、平地で曳くのに適している「三つ枕、四つ枕ざり」が使われました。

飛驒地方の中でも町屋といわれる都市部では、人や物資を運ぶための「箱ざり」や、人力車の代わりに人を運ぶ「人力ざり」も使われました。



飛驒の里で展示されているそり（手前は四つ枕ざり）

やがて、交通機関の発達や自動車の普及に伴い、そりは姿を消していききました。しかし、雪国の生活に欠くことができないものであったそりは、飛驒人の記憶の中に生き続けることでしょう。

飛驒民俗村（飛驒の里）では、飛驒中のそりが収集されており、その一部が「旧八月一日家住宅」で展示されています。

〈所有者〉 高山市

〈所在地〉 上岡本町1丁目

飛驒民俗村（飛驒の里）

〈時代〉 明治時代

〈見学〉 市民は無料で見学できます。

市民とわかるもの（免許証や保険証、小学校の名札など）を一人ずつ窓口で提示してください。